

島での一人前の漁師を目指して

～資源、情報、人との繋がりに支えられ、そして地域活性化へ～

屋久島漁業協同組合 上山 一利

1 地域の概要

屋久島は、鹿児島市の南約 130 kmの洋上にあり、九州最高峰の宮之浦岳をはじめとする 1,800m 以上の高峰がそびえ洋上アルプスとも呼ばれている。

また多様な野生の動植物が多く見られる自然豊かな島で、トビウオ、ゴマサバ、タンカン、屋久杉など農林水産業の盛んな地域である。また、世界自然遺産に登録されてからは年間約20～25万人の観光客が訪れる観光の島でもある。

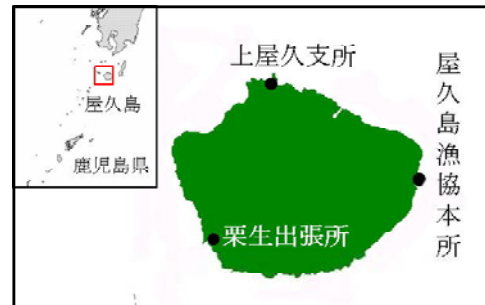


図1 屋久島の位置図

2 漁業の概要

屋久島漁業協同組合は、平成20年度組合員数250名で、平成20年の水揚量が1,230トン、水揚金額が4億8,559万円で、トビウオやゴマサバ、瀬物などの水揚げが主体である。

屋久島では、同じ島内でも各地区で漁業形態が大きく異なっている。漁協の本所がある安房地区では単協としては日本一のトビウオ水揚げを誇るトビウオロープ曳き漁業が中心となっているが、上屋久支所のある一湊では首折サバで有名なサバー一本釣りが主体となっている。そして私の住む屋久島南西部の栗生地区では、アオダイやハマダイ、カンパチなどの瀬物一本釣りがさかんに行われている。

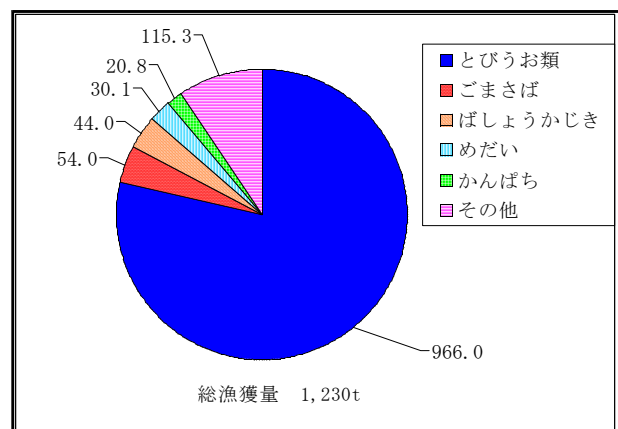


図2 屋久島漁協の魚種別漁獲量(単位：トン)

3 漁業就業の動機

私は屋久島町栗生地区で育ち、祖父や父が代々漁業に携わっていたため、中学校の頃から定置網や瀬渡し業の手伝いを行っていた。高校も自ら鹿児島水産高校を選択したが、高校卒業後は水産の世界から離れ、三重県で5年半ほどホームセンター等に勤務しサラリーマン生活を送っていたが、父が体調を崩したので屋久島に戻ってきて欲しいという連絡を受け、屋久島へ帰郷することとなった。しかし屋久島に戻ってきて私が目にしたのは、“体調を崩した”はずの父の元気な姿であった。

帰郷してからは、父の手伝いで定置網とトビウオロープ曳きに従事した。しかし就業してから2年後、それまで何とか維持できていた経営が魚価の低迷等により赤字の危機

に瀕し、従業員らと協議した結果、残念ながら廃業せざるを得ないこととなってしまった。そしてこれを機に私の漁師として一人立ちが始まることとなった。

4 一人前の漁師を目指して

(1) “情報収集”の大切さ

父の家業の廃業でいわば失業者になってしまったが、元々釣りが好きな私は自分で船を持って一本釣り漁業と遊漁船業で飯を食ってみたいとの思いが強くあり、気持ちにさほど焦りはなかった。

そんな折、タイミングよく 6.6 トンの新古船の物件を見つけたので、迷わず購入した。それからまず始めたのはトカラ海域の漁場探索だった。当時トカラ海域は全国的にも有名な大物釣りのメッカで、関東・関西からも多数の釣り客が来島していた。そこでまずは漁場開拓の勉強のため、海底地形図や GPS を片手にトカラ海域を走り回ったり、他の船からの情報の収集に努める日々が約 1 年間続いた。



図3 一人立ちした頃の頃

この 1 年間はほとんど収入らしい収入もない生活だったが、この時得られた情報は後の一本釣り漁業を営んでいくうえでの大きな財産となった。また何より、情報収集の大切さとその情報を元に自分の足で確認していくというスタンスが確立できたことは、その後様々な漁にチャレンジしていくうえで非常に重要な財産となった。

(2) “人との繋がり”に支えられ

漁を始めたばかりの頃は一本釣りでの水揚げが他の栗生地区の漁業者の半分に届かないくらいで、だいぶ苦労を強いられた。特にイシナギ釣りは他の漁業者が 1 シーズンで 100 万円水揚げする中、始めてから 4 年間は全くボウズの状況が続き、とてもしんどい思いをした。

しかしそんな私を支えてくれたのが栗生地区の先輩漁業者達である。先輩方からは、「1 ヶ月赤字でも平気でいられるくらいの太い気持ちが必要だ。」とか、「借金がないとやる気が起こらない。」などと励ましの言葉をいただき、なんとか踏ん張って漁を続けた。また、私は漁に出るたびに先輩漁業者に餌の切り方や仕掛けについてしつこく聞いて回った。先輩方はそんな私に嫌な顔をすることなく、一つ



図4 偉大な先輩漁業者達と

一つ親身になって教えてくれた。そんな人と人の繋がりが強い栗生地区で、私は周りの先輩漁業者に支えられながら漁を続け、次第に漁も軌道に乗るようになってきた。

人との繋がりの大切さが身にしみた私は、現在では屋久島の漁業者のみならず、更には鹿児島、トカラ、天草等の他港船とも情報交換を行っている。それらのネットワーク

で得られる情報は漁業技術に関するものばかりではなく、様々な漁場での天候、海況、各船の漁模様など多岐にわたり、例えば「あの船が〇〇を何 kg 釣ったから、このまま市場に出荷しても値がしない。できれば違う魚を狙おう。」といった市場動向など様々な状況に活用できるようになっている。

もちろんこのような情報はもらっているだけでは決して長続きはしない。相手を信頼・尊重し、自分の情報も分け隔てなく提供するといった、人との繋がりの中で続いていくものだと思っている。

(3) 限られた資源を維持していくために（マチ類資源回復計画が始まって）

様々な情報や人との繋がりに支えられ、徐々に一人前の漁師に近づきつつあった私だが、漁師にとって肝心の“資源の維持・管理”についてはさほど意識したことはなかった。それは栗生地区の先輩漁業者達が昔から実践してきた「瀬を枯らさないよう、小型魚が釣れたら漁場を移動する」といった取り組みを自然と学び、実践してきたからだと思う。

そんな中、平成 17 年 4 月より鹿児島県・沖縄県海域においてマチ類の資源回復計画がスタートした。この計画は、熊毛海域においては 7 カ所にマチ類の操業を周年もしくは数ヶ月禁止する保護区域を設定し、これを 5 年間継続するというものである。

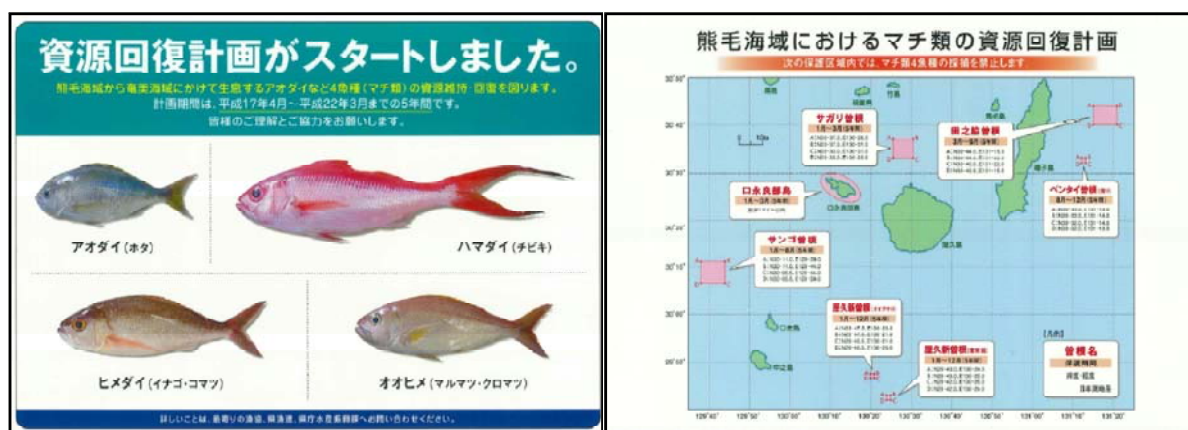


図5 現行のマチ類資源回復計画（平成 17 年 4 月～平成 22 年 3 月までの 5 年間）

曾根を輪番的に利用しながら漁をする習慣があったとはいえ、そのうちの主要漁場で操業できなくなることはやはり一大事である。しかし計画のなかには、“マチ類のうち特にハマダイは体長 70cm 弱、8 歳を越えなければ再生産に関与しない”という衝撃的な情報もあった。つまり今、小型のハマダイを獲り過ぎてしまえば次に繋がる親魚がいなくなってしまうということである。

そんな話を聞き、「今後も資源の維持・管理の取り組みは必要で、必ず拡大していく。」と感じた私は、瀬付ではない回遊魚を対象とした新たな漁法を開発できないかと考えるようになった。

(4) 新たな漁法への取り組み

そんな折、近海で宮崎県船が大シビ（キハダ）の旗流し釣りを行っている情報を得て、3 年前から私も挑戦するようになった。漁を行うたびに試行錯誤で漁具の改良も行い、

最近では一回の漁で400キロ程度の水揚げとまずまずの漁を収められるようになってきた。さらに一昨年暮れにはもっと魚を積めるようにと思い切って9.7トンの船を購入したので、今後は沖での泊まり込みの大シビ釣りに挑戦しようと考えている。

また冬場のハガツオ漁では沖の曾根を開拓し、1回の操業で200～400kgの水揚げができるようになってきた。これまでハガツオといえば、岸寄りの曳縄釣りとの固定概念があったが、時期と場所によっては思わぬ大漁につながることを知った。

また昨年から機会を得て、モジャコ漁に初挑戦することができた。実際挑戦するにあたっては、島内の指導漁業士や先輩漁業者方から船や網の扱い方等をみっちり教えてもらった。またインターネット等から水温分布図や黒潮の流れ、潮流、海面高度など様々な情報を収集・分析し、藻の流れを予測し、さらに仲間の3～4隻で情報を共有することで、結果として初挑戦ながらかなりの好漁を収めることができた。

このような経緯を経て、最近では4～5月はモジャコ漁、5～10月は遊漁船業とカンパチ、キハダ、10～2月はハマダイ、キンメ、ムツ等の瀬物類、2月～3月はイシナギやハガツオ釣りというように、複数の漁を組み合わせた1年間の操業サイクルを確立できるようになった。

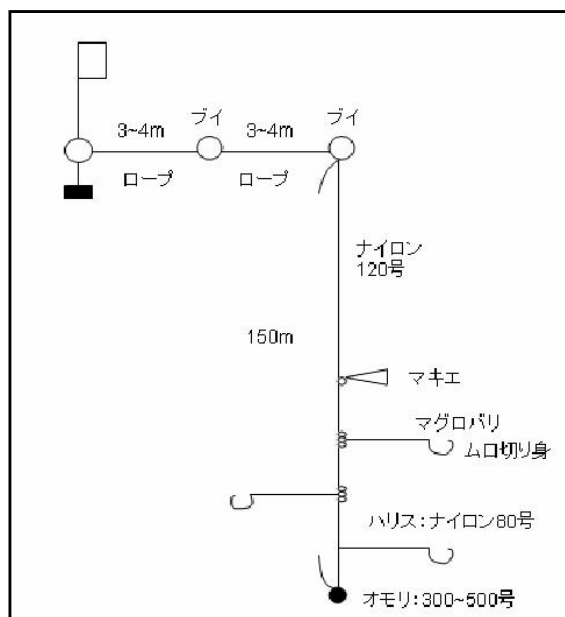


図6 宮崎県船の大シビ釣り漁具図

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
魚種												
モジャコ				←→								
カンパチ, キハダ						←→	←→	←→	←→			
ハマダイ, キンメ, ムツ	←→	←→								←→	←→	←→
イシナギ, ハガツオ		←→	←→									
遊漁船業					←→	←→	←→	←→	←→	←→		

表1 最近の漁の年間スケジュール

来年度よりスタートする次期マチ類資源回復計画において、栗生地区の漁業者間ではもっと広範囲に保護区を設定するべきだという声上がり、安房地区の漁業者とも協議を重ね、これまで主要漁場となっていた曾根を広範囲に保護区として設定することで協議が進んでいる。その為、今後も今まで以上に情報の収集・分析に精力的に取り組み、様々な漁に挑戦していく必要があるようである。

5 魚食普及を通じた地域活性化と魚価向上を目指して

(1) 新たな課題との直面

漁が軌道に乗り順調に水揚げできるようになると、今度は別の問題に直面する機会が増えてきた。それは「魚価の低迷」であり、その遠因となっている「魚食の機会の減少」である。この問題は、一人の漁師として解決できる問題ではなく、漁師全員と漁協が一体となり、地域の人達も巻き込んでいかなければ解決できない問題だと思った。

そこで、地元の人や大勢来島する観光客が、屋久島にはどのような旬の魚があるのかを知り、そのおいしい魚を手軽に購入できる体制を整えることができれば、現在の状況よりも大幅に需要を伸ばすことができるのではと考えるようになり、魚食普及活動の重要性を痛切に感じるようになってきた。

(2) あらんばら市での魚食普及へ

魚食普及活動の重要性を考えるようになった私は、まず「あらんばら市」での鮮魚販売と魚食普及活動を実践するようになった。あらんばら市とは、もともと栗生診療所の先生が栗生地区の振興のために8年前に会を立ち上げて地元の魚や野菜を寄せ集めて販売し、お祭りをするようになったものである。そのお祭りで地元の元指導漁業士である岡留氏が参加して魚を出していたが、一緒にやらないかと声を掛けていただき私も参加するようになった。

また平成18年末、これまで各地区ごとに独立していた青年グループ等が、屋久島漁協青年部として一本化したのをきっかけに、あらんばら市に青年部を巻き込んで鮮魚の販売活動を行い、メダイやアオチビキといった普段目にすることがないような魚の刺身を地元の人達に試食させるなど魚食普及活動を行うようになった。

そして21年度も11月23日の勤労感謝の日にあらんばら市が開催された。市の前には漁に出てカンパチを70kgほど用意した。また青年部でもカツオや首折サバ、メダイを販売用に準備し、アオチビキは試食用に準備した。

販売は午前10時からにもかかわらず、9時から魚販売のブースに人が集まり始め、販売開始直前には長い行列ができた。そして販売開始とともに地元の人達がカンパチの切り身を確保しようと押し寄せ、用意したカンパチの切り身70kg分は販売開始後わずか3分で完売してしまった。

また、青年部で準備したカツオや首折サバ、メダイもコンスタントに売れ続け、最終的には全ての魚が完売するなど盛況に終えることができた。

さらに試食用に用意したアオチビキの刺身も、「身がカンパチみたいでおいしい」と言ってもらったり、「この魚は売ってないの?」と聞かれたりと大変好評で、これら日頃馴染みのない魚であっても、美味しささえ分かってもらえればもっと食べてもらえる筈だと、確かな手応えをつかむことができた。



図7 平成21年度のあらんばら市にて

6 今後の取り組みについて

(1) 魚食普及活動への思い

屋久島は大勢の観光客が来島するにもかかわらず、なかなか地場の魚を手軽に入手したり食べたりできるところがないという話をよく聞く。そのような場所・機会がもっとあれば、現在よりも大幅に魚の需要を伸ばすことができると確信している。

そんな中、屋久島地区水産業改良普及推進協議会の事業により、私を含めた青年部員が実働部隊となり、島内全域の飲食店・旅館業者等に“屋久島産魚介類の需要実態はどのようなか。需要がないとすればその理由は何か。”といった聞き取り調査の実施が計画されている。

私自身、どのような意見が聞けるのか非常に興味深く、是非とも積極的に関わっていきたいと思っている。そしてその結果により、漁業者や漁協に何ができるのかを明確に打ち出せば、島の魚介類の需要・供給体制を皆と一緒に変わることができるのではないかと考えている。

(2) 新たな漁場開拓への挑戦

魚食普及活動のほかに今後取り組みたいと考えていることに、新たな漁場の開拓がある。屋久島南西海域は海底地形が複雑であり、実際に魚探で探っていくと現行の海底地形図では載っていない瀬がまだまだたくさんある。そういった新たな漁場を開拓し、これまで自主的に行ってきた資源管理を行いながら永続的に利用できれば、まだまだ一本釣り業者も生活していけるのではないかと考えている。

(3) 一人前の漁師を目指して

これまで述べてきたように、これまでの私は地元栗生の先輩方を中心に様々な人達に支えられてここまで来ることができた。今後は、これまで私が先輩方にお世話になってきたように、私が他の若手漁業者達を支えていきたいと考えている。

また、今後の取り組んでいきたい魚食普及活動、新たな漁場開拓は、できる限りの努力を払い、少しずつでも着実に進めていきたいと思っている。そしてその結果が、これまでお世話になった方々へわずかでも恩返しになり、さらに他の若手漁業者達が漁を続けていくうえでの一助になれば、それが“一人前の漁師”になった証になると思う。